川端康成『乙女の港』論
――「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から

中嶋展子

一、「七　新しい家」と中里恒子草稿

『乙女の港』は、昭和十二年六月号から昭和十三年三月号までの十回に渡り「少女の友」に発表された。この作品は、中里恒子の原作であったと「朝日新聞」（平成元・5・19夕刊、17面）に報じられている。新聞記事には、神奈川近代文学館の職員が「逗子市の中里家」を「故中里恒子展」開催準備のために調査したところ、「乙女の港」の「二十枚ほどの草稿を発見した」と、その経緯が記されている。『乙女の港』の原作者である中里恒子と、その執筆者である川端の関係については、次のような見解が述べられている。川端が主婦作家であった中里の才能を「早くから認め、助言をしたり、直接指導」をしており『乙女の港』もまた、中里が「全幅の信頼を川端に寄せて」下書きをしていたことが書簡からうかがわれ、川端が「執筆指導」も兼ねて中里に原作を依頼していたとみられる。

最初に、川端康成と中里恒子の交流によって成った『乙女の港』の成立過程を、神奈川近代文学館所蔵の中里恒子「乙女の港」草稿に触れながら辿って行きたい。

「乙女の港」草稿は、四百字詰め原稿用紙に通し番号が「1」から「20」までの十九枚（注①）、別の通し番号「26」から「32」までの六枚（注②）の原稿から成っている。以後、「1」から「20」までの草稿をA、「26」から「32」までの草稿をBとして表記したい。この中里恒子の草稿は、川端の『乙女の港』の「七　新しい家」（昭和12・12「少女の友」）にあたっている。

ここで『乙女の港』のストーリーを、「七　新しい家」まで簡単に述べておきたい。基督教女学校（ミッション・スクウル）に入学した三千子は、二人の上級生から手紙を受け取る。それは五年生の奥ゆかしい洋子と四年生の活発な克子からの姉妹のような友情を申し込む手紙であったが、三千子は洋子と親しくなっていく。夏休みを迎えた三千子は、伯母の別荘がある軽井沢に出かけ、家の経営の傾いている洋子は旅行に行かないで今後の進路について考えることになった。その軽井沢で三千子のことを諦めていない克子に偶然、出会う。そして、「七　新しい家」で三千子は、克子の強引さに惑わされ休暇を過ごしたことで、洋子に後ろめたさを

感じている。軽井沢から帰ってきた三千子は洋子に再会し、克子とのことを責めない洋子から専修科には進まず来年の春、女学校を卒業することを告げられるという内容である。

「七　新しい家」で自宅に帰った三千子は、家の都合で牧場の丘の南に建てた小さな住宅に移っている洋子に電話をし、翌日の朝、会う約束をする場面がある。まず、この部分を草稿Aと草稿Bで比較したい。

中里恒子「乙女の港」草稿Aでは、軽井沢から帰ってきた三千子の電話を洋子が受け取ったのは、婆やと外で夕焼を眺めてからさみしい食事を二人でとっている時である。草稿Aの「15」から「17」にその様子が描かれている。また、川端康成『乙女の港』の「七　新しい家」もこの場面との、大きな違いはない。

草稿Bに目を向けると、婆やが「出征のお見送り」に行くことが書かれ、洋子も牧場で働いている若者二人が応召したために、「甲斐甲斐しく飼料の世話を受けもつてゐた」とある。そして洋子が、夕方の牧場を散歩していると、家の陰から、婆やの電話を知らせる声が聞こえてくるのである。草稿Bの「29」、「30」にあたるこの場面には、「出征」などの戦争についての記述がある。

草稿Aで婆やと夕焼を眺めるところが、草稿Bでは、洋子の生活に戦争が影を落としている場面として描かれている。ここまでで判るように、草稿Aと草稿Bは、軽井沢から帰ってきた三千子の電話を受けるという同じ場面を描いたものだが、それまでの出来事の違いがみられ、AとBは同時に成ったのではなく、別々の草稿として執筆されたものと考えられよう。

この二つの草稿について、川端の書簡（注③）から考えていきたい。川端は、昭和十二年十月十六日附（信州軽井沢藤屋より神奈川県逗子町桜山仲町あて）の手紙で中里に向けて、次のように記している。

軽井沢が二度続き、話の進みもヤマも前と余り変りませんので、少し工夫して、大分書き変へました。

戦争は入れないこととし、戦前のつもりにしたいと思ひますがいかがですか。最初のやうな調子でなるべく願ひます。

三月までとすれば、アト四回ですが、なるべく十一月中に全部お書き下さいませんか。本になれば、売れるかと思ひますゆゑ、それもお楽しみとして、よろしく願ひます。

やはり一回毎に進みと山を作つていただきたく存じます。

書簡での「軽井沢が二度続き」というのは、『乙女の港』の「五　高原」（昭和12・10）、「六　秋風」（昭和12・11）にあたっている。「少女の友」十月号、十一月号の三千子が軽井沢で克子と過ごした夏休みを描いた回が続いたので、次の十二月号「七　新しい家」では「少し工夫して、大分書き変へました」と川端が言っていると考えられる。

続けて、「戦争は入れないこととし、戦前のつもりにしたいと思ひます」とあり、この中里恒子宛の手紙が「七　新しい家」を指した内容であることが、窺えるのである。草稿Bで確認したように、そこには「出征のお見送り」とあり、その他に婆やは「国防婦人会のエプロ

ンをつけて」見送りに行き、その後遠くから「万歳の声」が聞こえ、「壮行トラックの軍歌が、途切れ途切れにきこえて」くると、書かれている。草稿Bでのこの部分を入れないことにして、草稿Aでの夕焼を婆やと眺める場面に書き換えられたのである。

つまり、中里の「乙女の港」草稿Bが先に書かれ、それを川端が書き換えたものを再び、推敲したのが草稿Aと言えよう。ここまでで明らかになった草稿Bから草稿Aへの書き換えの過程から、中里に川端が伝えた「乙女の港」の改稿内容を、その比較によって探ることが可能と思われる。以下、草稿Bから草稿Aへの改稿を比較していきたい。

草稿Bは、山の手から出て家が経営する牧場の事務所の傍に建てた新しい洋子の家の描写から、三千子と電話で次の日の朝、会う約束をするところまでが描かれている。新しい家についての洋子の気持は、草稿Bで次のように記されている。

洋子は毎日、少しづつ出来上つてゆく建物を見ながら、寝るところと、普段使ふ部屋のほか、何も余計なもののないこの家を、とても明るく、清潔だと思つた。

今までの、山手の古めかしい、広い広い住居から考へれば、随分粗末で貧しいけれど、わずらはしさの一つもない、身軽るな生活が展けようとしてゐるのは、なんといふしあはせだらう。

この、小さい、清潔な家から、新しく育つてゆくこれからを考へると、本当にこのささやかな住居こそ、希望の船だ。

「でも、きつと、三千子さんびつくりするわ」

洋子はこんなことを考へながら、マダムのふらんす流の手紙を読み直した。

とある。家の都合で移った住まいは質素になったが、これから新しく成長していく自分を育む家として希望を持つ洋子が窺える。

この場面が草稿Aでは、

山小家(ママ)のやうな、飾りの少い形式で、羽目もステーンで塗つてある。古い椎の木を背景に、煉瓦いろの屋根だけがあかるい。

と、「山小家」風で「古い椎の木を背景に」した新しい洋子の家の外観が描かれている。そして洋子は、この新しい家の明るさを

……どの部屋もどの隅も明るくて、家のなかに、穴のやうな翳がないので、洋子は、なんだか、夜のない国へきたやうな、まばゆさを感じた。

と書き加えている。この箇所の草稿Aと川端の『乙女の港』との違いは、ほとんどない。川端が目を通した後と思われる草稿Aの新しい家の描写には、外観から眺めた煉瓦色の屋根の明るさや、隅まで明るい「夜のない国」のような室内の様子が書き加えられており、文章に膨らみが出ているように思われる。

続けて洋子は、三千子がこの新しい家を見たら驚くだろうと思うが、草稿Aでは新しい家を「ちつとも不仕合せ」に思っていないことが分かると三千子も、山の手の家を失ったことを喜んでくれるだろうと考えるところが、書き足されている。草稿Aで、洋子がこの家を人生の新たな出発の場として前向きにとらえようとしている点が、強められ

ていると考えられるのである。加えて、マダムからの手紙を読みかえすまでの間に、次の文章が加筆されている。

みて丁載（ママ）、この新しい家の隅ずみまで光線の通る明るさ、そして、日翳のない丘。

どんな小さな魔ものだつて、もう、あたしの傍にかくれることは出来ないのだから、あたしは、天の花園の花のやうに、ずんずんと美しく、匂ひよく育つてゆかう。

と決意する。ここでも、「新しい家」という十二月号の題名にふさわしく新居の明るさと前向きで清らかな洋子の決心が、より強調されている。

新しい家への洋子の思いを描いた箇所での草稿Bから草稿Aへの書き換えで、洋子の家を外側から描写し作品に広がりを持たせ、また新しい家の明るさを様々な表現で描き表しているところが見出せた。そしてその家の明るさが、現在の境遇に負けず前向きな希望を持つ洋子の気持ちの輝きへと、密接に繋がるように改稿しているのである。

これらの加筆によって、洋子の前向きな決意が題名に重なり、またその家の明るさを書くことで、「新しい家」に託された洋子の人生の再出発というテーマを際立たせていると考えられる。ここでの、テーマに向けて文章に広がりや明るさを持たせるという方法が、川端の中里に伝えた改稿内容であったと、草稿の比較から示されると思われる。

なお、中里恒子の川端宛の書簡からも、この交流について記した箇所を挙げておきたい。昭和十二年九月十八日附（逗子桜山仲町より信州軽井沢旧道藤屋旅館あて）の手紙に、

お手紙拝見いたしました。乙女の港お言ば通り注意いたしませう。どんな風に書いても、うまくなほして下さる　こんなわがままな考へ方が私にあるからかもしれません。

一回分終り　二回めの十枚まですすみましたがお手紙拝見してなほすつもりになりました。廿二日頃まで――もし間にあはねば一回分だけお送りいたします。

と手紙にある。この中里の書簡の前に川端が九月十四日附（信州軽井沢藤屋方より神奈川県逗子町桜山仲町あて）で送った手紙に、

少女の友十月号は、当地で買ふの面倒ですか（ら）お送りしません、そちらで御入手下さい。（中略）

乙女の港はだんだん文章が粗くなり、書き直すのがむつかしく、書き直すといふことは、うまく参りませんゆゑ、なるべく初めの調子でやつていただくと助かります。

と記している。

中里と川端の書簡のやり取りから、九月に入り「少女の友」十月号の「五　高原」（昭和12・10）まで書かれていたことが窺えよう。中里の九月十八日の書簡では、続く「六　秋風」（昭和12・11）を書き終わり「二回めの十枚まで」と記しているので、「七　新しい家」の十枚目までを書いていたと推測される。

この「七　新しい家」の十枚目までの筋を草稿Aを参考にして挙げると、軽井沢で熱を出して寝込んでいる三千子に克子が言い寄ってい

るところまでが描かれている。この辺りまで「乙女の港」の草稿を書いた時、川端から文章が粗くなってきているので注意するようにと、指摘されたと考えられる。川端の九月十四日附の書簡には、続けて

三千子は港に帰つて、洋子の心の戻るのに少し曲折あり、この三角関係少しモメタ方が、つなぎやすいかと思ひますがいかがですか。克子の天下あつてもよいかと思ひます

と、「乙女の港」のストーリーについて言及している。三千子が軽井沢から帰って来るのは「七　新しい家」でのことであり、「五　高原」、「六　秋風」はそれほど直さなかったが、「七　新しい家」では、先に挙げた昭和十二年十月十六日附（信州軽井沢藤屋より神奈川県逗子町桜山仲町あて）の手紙にあるように「少し工夫して、大分書き変へ」、「戦争は入れないこと」にしたのである。「七　新しい家」に書き直しが多くあったとみられるが、中里の手紙にあるように「どんな風に書いても、うまくなほして下さる」という、川端の改稿を信頼する言葉に、中里の思いはあろう。そして、これは川端と中里の原稿を介しての師弟関係を思わせる交流の内実を、言い得たものと考えられるのである。

また、書簡からは『乙女の港』以外にも、川端が関わった作品が見出せる。川端の九月十四日附の書簡には、

活字になつたところを読みたいのですが、文芸まだ転送されて来ません。孤児院の少女達の生活のところが、活字ではどうか見たいと思つてゐます。続けてお仕事お見せになるやう望んでゐます。

とあり、雑誌「文芸」掲載の中里恒子の作品を川端が事前に読んでおり、続けて原稿をみせるよう促す内容である。続く九月十九日附（信州軽井沢藤屋旅館より神奈川県逗子町桜山あて）の手紙で川端は、「物語風景は感服。よいものです。誰が何と申さうともよろしいゆゑ、つづき是非お書きなさい」と励ましている。ここで川端が記した「物語風景」は、昭和十二年の「文芸」十月号に寄せられた中里恒子の作品「物語風景」のことを指していよう。九月十四日の書簡で川端が記している「文芸」の作品と「物語風景」は、発表雑誌と孤児院の少女達のことが描かれているという内容の一致から、同一のものと考えられ『乙女の港』同様に中里恒子の作品も、川端が作家としての文章指導をしていたとみられるのである。

この頃の川端は、新人作家を多く発掘している。北條民雄の「間木老人」（昭和10・11「文学界」）を推薦し、「いのちの初夜」（昭和11・2「文学界」）を世に送り出した同号では、「『いのちの初夜』に就て」を寄せている。

また、岡本かの子の小説家としての文壇への足がかりとなった、「鶴は病みき」（昭和11・6「文学界」）も紹介した。岡本かの子とは川端が東京帝国大学時代に出した同人雑誌「新思潮」からの付き合いであるが、この「鶴は病みき」を書いたかの子との交流を川端は、「岡本かの子追悼」（昭和14・4「文学界」）に次のように記している。

私に相談され、かの子さんが本腰に小説を書き出さうとして、原稿を見せるやうになつたのは、昔の「新思潮」からの因縁によ

るが、爾来数年間、一平氏ともども、終始私に注がれた礼譲と感謝とは、まことに尊いものであつた。（中略）私は随分多くの後進の原稿を見て来たが……。

と、振りかえっている。ここからも川端が、岡本かの子をはじめ「多くの後進の原稿」を見、助言してきたことが窺える。その新人の発掘と指導は、昭和十年頃にもなされており、中里恒子との『乙女の港』の草稿のやりとりや、「物語風景」の原稿を見ること等もその一環として考えられるのである。

川端康成の名で出された『乙女の港』は、中里恒子による下書きがあって成立した作品であるが、そこには川端の新人作家を導くという、師弟関係にも似た交流に支えられた作品の成立過程が垣間見られる。川端は、『乙女の港』において文章表現で作品に広がりや彩りを添えて、そのテーマを明らかにしている。このような文章の方法を、中里との草稿のやり取りは伝えているのである。

また、昭和二十四年六月号から昭和二十五年七月号の「ひまわり」に連載した「歌劇学校」も、近江ひさ子の原作であったと言われており、その他にも原作が存在する女性向け小説が発表されている。

今回の中里恒子の草稿との比較によって、川端が後進の作家に小説の方法を草稿の段階で指導していたことが確認され、原作のある川端作品の方向性を示す一つの例証となったと思われる。

二、『乙女の港』の「魔法」と「愛」

次に、四百字詰め原稿用紙で十九枚の中里恒子「乙女の港」草稿Aと、川端康成『乙女の港』「七　新しい家」を比較することで、川端が『乙女の港』で描こうとしたテーマを考察していきたい。

「新しい家」は軽井沢に滞在中、熱を出して寝ている三千子のところに、克子が訪ねて来る場面から始まる。三千子は洋子への変わらぬ想いと、一方で克子にひかれる気持ちに揺れ動いている。中里の草稿Aでは先に

……逢へば、三千子の気をまどはすやうな、克子のあの強い美しさから離（ママ）れてゐると、体ぢゆうの力がみんな抜けてしまふやうに、ぼんやりしてしまふのは何故だらう。

と克子への気持ちが書かれ、「洋子姉さまの悲しさが、あたしの心をさます為に飛んできたのだわ」と、三千子が熱を出したのは寝床で洋子のことを考えるためだったのかもしれないと思う場面が描かれている。

川端の『乙女の港』は、この洋子への想いを先に置き、後に続く克子への気持ちの前に次の文を加えている。

病気になつたことさへも、自分への戒めのやうに考へて、一生縣命、克子の心の誘ひと戦つてゐる。三千子のかぼそい心……。

とあり、克子の魅力に引き寄せられていく三千子の揺れる気持ちが、より明確になっているのである。

続けて、三千子がうわごとで洋子を呼んでいたと、伯母が話したことで克子が嫉妬をするところを見ていきたい。三千子のうわごとの話を聞いた克子は、三千子の夢の中の世界でさえ洋子に渡したくないと思い、三千子の夢の番をすると言いだす。ここで、夢の番をすると言う克子に対する伯母の言葉とその後の場面が書き換えられている。

中里の草稿Aでは、「まあ、克子さんたら……本当にあなたのやうな方が、三千子の番兵さんになつて下さるんですもの、わたくしも軽井沢へ招(ママ)んだ甲斐があると思つてますの」と、その友情を歓迎している。

一方、川端の『乙女の港』は「……夢の番が、どうしてお出来になるの？　夢つて、つかまへて、縛つとけますの？」と、伯母は感心しつつも疑問を持っている。そして、この伯母の疑問に対する克子の反応は、川端が新たに書き加えた箇所の中でも重要なところと思われる。

「ええ、魔法で退治ちやひますわ。」

と、克子は勝気な眼を、きらりと光らせた。

とある。ここでの「魔法」は、三千子を夢の中までも自分の虜にして恋させようとする克子の思いを表した言葉であろう。川端が、新しく書き加えた箇所に「魔法で退治」するという克子の言葉があるが、この言葉は『乙女の港』の他の部分からも見出せる。

ここで、「魔法」という言葉が使われているところを、『乙女の港』の「五　高原」、「六　秋風」から示したい。

「五　高原」で、三千子が軽井沢に着いて伯母と車で街に出た時、「―三千子は魔法の町に連れて来られたやうな気がした」と思っている。そして、伯母の別荘で夕食を済ませたあと、本町通を歩いていると偶然、克子に出会う。次の日の朝、三千子を誘いに来た克子の「眩しいほど健康で、いかにも高原の少女らしい美しさ」に気づき、三千子は「妖しい魔薬の匂ひのやうな力」によって「自分といふものが消えてなくなつてしまひさう」に思うのである。そして、洋子のことを想いながらも克子と遊びに行くようになった三千子は、「お姉さまのことを忘れてしまつて、こんなにはしやいでゐる自分が、悪い魔法使ひのお婆さんのやうに憎らしい」と思うところがある。

三千子が克子との仲を深めることになる軽井沢に着いた時、そこを「魔法の町」と思い、克子に心を奪われそうになると「魔薬の匂ひのやうな力」を感じている。また、克子と遊ぶ自分を「悪い魔法使ひのお婆さんのやうに」憎らしく思っているのである。このことから、「五　高原」での「魔法」という言葉は、克子と三千子の間にある恋心に似た感情を表すものとして意識的に用いられているように思われる。

「七　新しい家」で、夢の中であっても三千子を振り向かせるために克子が言った「魔法で退治」するという言葉と同様に、「五　高原」での「魔法」も恋の惑わしの意味で用いられていると想像されるのである。

翌月の「六　秋風」でも、三千子は自転車を習った時、自分は克子の好きなように変わってしまうと思う。克子の言いなりになることに抵抗を感じた三千子は、

……この人の傍にゐては、もしかしたら、魔法にでもかかつたやうに、お姉さまのところへ帰る道が、見つからなくなつてしまふのでないかしらと、不安だつた。

とあるように、ここでも克子の恋の惑わしが「魔法」という言葉で表されている。「五」、「六」の「魔法」が含まれる箇所から、『乙女の港』では主に三千子と克子の間にある恋心を「魔法」として描いており、「七　新しい家」の改稿のように、その言葉を意図的に用いるように川端が促した可能性が高いものと考えられるのである。

再び「七　新しい家」の比較に戻ると、夢の番の話をうとうとしながら聞いていた三千子が目を覚ましたことに気付いた克子は、しばらくして素敵なことを考えついたと話しかける。それは、二学期が始まったら二人でお揃いのすみれの花を、いつでも胸のポケットに入れておくというものであった。それを聞いた三千子は戸惑うが、克子は、「うん。友情と愛のしるしに……。」と言う。そこで三千子は、春に貰った克子の手紙に書かれていた

私はすみれの花が、なんの花より一番好きですの。
あなたを「私のすみれ」とお呼びしてよろしいでせうか。
あなたは私になんの花をお返事下さいまして？

という言葉を思い出す。この手紙を貰った三千子は、何の花も克子に返していなかったと気付くが、この提案を克子ほど素敵なこととは思えないでいるのである。

川端の『乙女の港』で描かれている、克子のすみれの花の提案の場面は、中里の草稿Aを省略した箇所がある。中里の草稿Aは、克子が「友情と愛のしるしに」と言った後、

「愛」の花言葉をもつ、すみれの花。
それを知つてゐて、どうして、克子の愛のしるしを胸につけられよう。

と三千子が考えるところが書かれ、続けて克子からの手紙を思い浮かべている。つまり、三千子がすみれの花の花言葉が「愛」であると思い出すところを、川端の『乙女の港』では省いているのである。そして、克子の提案を聞きながら萎れた花はどうするのだろうと、

「友愛」を誇るために、毎日花の死骸を棄ててゆくといふことは、なんだか、愛情のしるしに似合はしくなく、残酷な気がして、三千子は、克子の言ふほど、素敵とは思へなかつた。

と感じている。川端の『乙女の港』では、克子の「友情と愛のしるし」という言葉の「愛」を強めないために、すみれの花の花言葉の部分を省いたのではないかと考えられる。そうすることで、克子の「友情と愛のしるし」という言葉の友情が生かされ、三千子の考える「友愛」という友達としての関わりを思わせる言葉へと繋がるように書き換えられたのではないか。すみれの花の花言葉を入れないことで、二人の少女の交流は、克子がすみれの花に込めた「愛」よりも、三千子の思う「友愛」としての意味合いが強められていると言えよう。

ここでの克子のすみれの花に込めた思いを「愛」として表すことを回避しているかのような川端の改稿の意図は、「一　花選び」に書か

れていた克子の手紙の用い方からも垣間みられる。三千子が貰った克子からの手紙は、次のように記されていた。

私はすみれの花が、なんの花より一番好きですの。すみれの花言葉を御存じでいらつしやいませう。

あなたを「私のすみれ」とお呼びしてよろしいでせうか。

あなたは私になんの花をお返事下さいまして？

とあり、「すみれの花言葉を御存じでいらつしやいませう」が、「七　新しい家」では中里の草稿A、川端の『乙女の港』共に書かれていない。中里の草稿Aは、先に挙げたように三千子がすみれの花言葉を思い出す場面で、手紙の問いかけに関わる内容を思っており、そのために克子の手紙が省略されたのではないかと考えられる。そして、その草稿を受け継いだ川端が手紙の引用部分をそのままにして、三千子がすみれの花言葉について思い出す場面も省いたのではないか。ここからも、川端が克子の思いを「愛」として表さないように、原稿を整えていたことが窺えよう。

「一　花選び」から「七　新しい家」へ克子の手紙を用いる時、「愛」の意味を持つすみれの花言葉について問いかける部分が省かれており、克子の三千子への思いと川端の考える「愛」との違いが見出せるのである。

「七　新しい家」のストーリーに戻ると、すみれの花の話題のあと、伯母さまが持ってきた三千子の母からの手紙で、一、三日のうちに迎えがくることがわかる。克子と軽井沢で過ごしていた三千子は、ようやく実家に戻り洋子に帰りを知らせる電話をするが、「七　新しい家」ではその前に洋子の新しく移り住んだ住宅の描写が書かれる。

ここからは、中里の草稿Bと草稿Aの比較で明らかにしたように、新しい家の明るさと困難に負けず前向きに生きてゆこうとする、洋子の希望が重なるように描かれた場面になっている。川端が目を通した後に書かれた、草稿Aの住居の描写には、「どんな小さな魔ものだつて、もう、あたしの傍にかくれることは出来ないのだから」と、洋子が思うところが書き加えられていた。この「小さな魔もの」だってかくれることができない明るさについて考える時、これまでに繰り返し用いられていた「魔法」の意味を重ねることができるのではないか。ここでは、洋子と三千子を裂こうとする克子の魔の手ですら洋子を惑わすことはできないということを暗示していると考えられる。

そして、洋子は、マダム・セン・ピエエルからの手紙を読みかえす。このマダムは、洋子に理解を示してくれている女学校の教師で、家を移ることになった洋子に手紙を出していた。その手紙の内容は新しい家での出発を励ますもので、

神さまの思召によつて、あなたが生れたままのあなたに還り、人びとのために働く尊さを覚える日の近いことを祈つてやみません。

という言葉で結ばれている。「小さな魔もの」に惑わされまいと、続けてマダムからの手紙を読みかえした洋子は、「人びとのために働く尊さ」へと目を向け始めているように思われる。続いて、草稿Bでの戦争の部分が省かれ、草稿Aで書かれた婆やと洋子が夕焼を眺め、食

事をとっているところに三千子からの電話がかかってくるのである。

そして、電話で翌朝に会う約束をした三千子は、朝を迎えて次のように思う。

「あたしは変つてゐるかしら、克子さんの魔法で。」

ほんたうに、魔法をかけられたやうな愛情、その怪しい呪術のやうな力も、あたしが洋子姉さまの前へ出れば、きつと脆く、消えてしまふ。

そしてあたしは、元の三千子になれる……。

この部分を中里の草稿Aでは、

あたしは変ってゐるかしら、克子さんにかけられた魔法のやうな愛情も、きつと洋子姉さまの前へ出れば、もろくほどけてしまふわ、そして、あたしは元の三千子になれる…

と書かれており、「魔法のやうな愛情」と記されていたところを川端の『乙女の港』では「克子さんの魔法」、「魔法をかけられたやうな愛情」と詳しく書き、「その怪しい呪術のやうな力」と説明が加えられている。ここからも川端が、克子の愛情を怪しい恋の惑わしとして、「魔法」という言葉で表そうとしていたことが窺えるのである。なお、三千子が洋子と再会を果たすところまでが、草稿Aにあたっている。

「七　新しい家」は、次のような場面で閉じられている。洋子は三千子に会い「なにもかもすつかり、新しい気持なのよ」と言いながら、心の内で「だけど、三千子さん、あなただけは……。惜しいの。離したくないの」と思う。洋子は新しい家で、「小さな魔もの」も隠れることができないくらいの明るさを感じていたが、三千子にだけは密かに恋する気持ちを持っていることがわかる。そして、洋子は克子の件で三千子を責めることもなく、この春、卒業すると三千子に伝える。これからについて語り合った二人は、そこで背くらべをした記念にナイフで「古い椎の木」に名前と年月日を入れる。

ここでの「椎の木」は、中里の草稿Bから草稿Aへの改稿過程で、洋子の家を外からみた風景として書き加えられた部分である。また、草稿Bの戦争について書かれたところが、草稿Aで婆やと洋子の夕焼を眺める場面に書き換えられ、「二人は、椎の木のそばへ並んで」、「最後のまたたきに染つた空」を拝んだとある。川端が、戦争の記述のかわりに提案した夕焼の場面にも「椎の木」が描かれており、意識的な加筆箇所と思われるのである。ここから、洋子と三千子の背くらべのエピソードをみると、「新しい家」の結末を飾るために「椎の木」を川端が最後でも用いた可能性が考えられる。そして、終わりにこの古い「椎の木」もまだ茂って行くことだろうか、「若い二人が、古い木に負けないやうに……」という言葉が書かれる。この言葉のように、三千子への気持ちを密かに持ちつつも洋子は、マダムの手紙にあった「人びとのために働く」という方向に目を向け始めており、三千子もそんな洋子と共に成長していくであろうことが「椎の木」の様子に暗示され、この場面が結ばれる。

ここまで「七　新しい家」を、中里の草稿Aとの比較によってみてきた。この比較から、一つは川端が「魔法」という言葉を意図的に用

いていることがわかった。『乙女の港』に繰り返し使われている「魔法」は、主に三千子への克子の愛情と、それに翻弄される三千子の恋心を指す言葉であった。また、克子の三千子への思いをすみれの花言葉である「愛」として表現することを、川端が避けている点が挙げられる。この二つから、川端は克子の三千子への恋心を「愛」とは異なる惑わしとして描いていると考えられるのである。このような川端の改稿は、『乙女の港』での「愛」のテーマを書くために行われたものと思われる。

「七　新しい家」では、洋子も三千子だけは「離したくない」という思いを抱え、三千子も克子に惑わされながら洋子の心を取り戻そうと必死の状態に陥っている。そして、克子も利己的な感情で三千子を翻弄しており、三人の少女はそれぞれの迷いの中にいるのである。しかし洋子は、新しい家の明るさとマダムの手紙に支えられながら、これからしっかりと生きて行こうと希望を持つようになる。

ここに川端の描こうとした「愛」の芽吹きが託されているように考えられる。「七　新しい家」の結末では、洋子が「人びとのために働く尊さを覚える日」を迎えることができた時、川端の考える「愛」がそこに描かれるかもしれないことが「椎の木」の描写に暗示されていると言えよう。このように、川端は『乙女の港』で「愛」を描こうとして、そのテーマに向けての改稿を「七　新しい家」で行っているのである。

なお、「七　新しい家」の最後では、洋子の未来への希望と「椎の木」の様子が重ねられている。この「椎の木」は中里の草稿Bから草稿Aへの改稿過程で、川端が目を通したあとに書き足された部分であり、その風景を結末に用いて洋子の希望を際立たせることは、次回へ作品を繋ぐための一つの方法になっていよう。ここから、各連載ごとにその小題に合わせたまとまりのある結末を描いていくように促す川端の姿が見出せる。そして、それぞれの小題が『乙女の港』の一部として、「愛」のテーマに繋がっていくように整えられているのである。

三、博愛への目覚めと旅立ち

「七　新しい家」で迷いの中にいる洋子、三千子、克子がどのように成長していくかは、「八　浮雲」から「十　船出の春」で描かれていく。「八　浮雲」、「九　赤十字」で二学期に入り、三千子に克子が親しくするのをこらえながら洋子は、優しく静かに学生生活を送る。そんな中、迎えた運動会の競技で転んだ克子は、怪我人を助ける赤十字で控えていた洋子に介抱される。そこでの洋子の優しさに、今までの態度を反省した克子は、翌日、お詫びの言葉を三千子に伝え、三千子が洋子を迎えに行く。この運動会の出来事で克子は、三千子への「魔法」のような恋心から放たれ、洋子をお姉さまと呼びたいくらいに思うようになる。克子は、ようやく恋の迷いから抜け出したと考えられる。

そして「十　船出の春」で、洋子と三千子の互いの旅立ちが描かれていく。運動会の出来事から、何の心配もなく過ごすことができるよ

うになった二人は、クリスマスを迎え洋子が三千子を教会に招待する。そこで洋子の教えた日曜学校の子供達や、託児所の子供達とクリスマスのお祝を分かち合うことが、洋子から三千子へのクリスマスの贈物であった。また、洋子はこの贈物のなかに、「この頃考へてる希望が入つてるのよ」と言っている。日曜学校の子供達をマダムの紹介によって教えることで変化していった洋子の考えは、次のように説明される。

働くといふことは、なにも職業婦人になることばかりぢやない。自分の持つて生れたものを、上手に活かして使ふのこそ、ほんたうの働きといふものだ。報酬を得ないでも、自分が少しでも人のために使へるならば、喜んでそのなかに自分を置く。そしてそのことに、しあはせを感じる。洋子はそんな心を、深く胸のなかに植ゑつけたのか。

とある。この言葉に女学校卒業後の道が暗示されており、また洋子の成長も読み取れよう。「人のため」に働くという奉仕の心を持つように成長を遂げた洋子に導かれ、三千子もまた一歩を踏み出していくのである。

三千子の心の変化は次のように書かれている。「十　船出の春」のはじめで、山の手公園を洋子と歩く三千子は、このままお正月を迎え、卒業式になってしまうと洋子との別れが来ることを心配している。その気持ちを洋子に、

「……お正月がすむと、学校の門を、お姉さまは出て行つておしまひになるのね。ほかの誰が出て行つてもいいけれど、お姉さまひとりだけが通れない、魔法の綱が張れないかしら……」

と言う。それを聞いた洋子は、二人は一緒に暮せはしないけれどしっかりしてさえいれば「心と心とは、一生でも通ひ合へる」と諌めるが三千子は、心の繋がりの大事さに気付かないでいる。そんな三千子に洋子は、「信仰の世界を知らないせゐなのよ」と、答える。「十　船出の春」の始まりで三千子は、洋子への恋心のために「魔法の綱」を張って離ればなれにならないようにしようと考えているのである。

しかし、一方の洋子は、すでに教会での日曜学校の手伝いによって奉仕の精神に目ざめていることが、言うことを聞かない三千子への返答から窺えよう。そんな三千子であったが、洋子に招かれたクリスマスで「自分の持つてゐるものを、貧しい人達に分ける、その悦びを知ること」が大切だという言葉を聞いて、奉仕の心の大切さを知ることになる。そしてクリスマスの余興の舞台を前にして、夏の高原で「克子に激しく揺すぶられてゐた、あの時の自分と、今の自分と、似ても似つかぬ、この心の平和」を感じる。洋子に招かれたクリスマスで奉仕の精神を知りその心に導かれた結果、惑わしであった恋心から「心の平和」をもたらす「愛」へと、三千子の心のよりどころが変化したと思われる。

この場面では、三千子の心を成長させた洋子の奉仕の精神が「愛」であり、川端はその大切さを『乙女の港』の結末で描こうとしていたと考えられる。「七　新しい家」で克子の恋心を、すみれの花言葉である「愛」の部分を省いて記し「魔法」としていたのは、結末で洋子

が目覚める博愛の精神を真の「愛」として描こうとしたための川端の配慮と思われるのである。

その後、洋子と三千子は卒業式で送辞と答辞を読み合い、二人の友情を胸に互いに巣立っていくことを予感させて『乙女の港』は閉じられる。そこには、清らかな二人の明るい青春を博愛の精神が包み込んでいるかのような印象が残る。

四、川端作品の愛

『乙女の港』は、中里恒子の草稿との比較から、川端がその回で表そうとすることや作品のテーマに向けて、文章に膨らみや明るさを持たせながら改稿をしていることがわかった。中里と川端は、原稿の指導も兼ねた師弟関係のような交流を持ち、原稿の交換によって川端から小説の息づかいが伝えられていたものと、書簡や川端の改稿箇所から想像されるのである。このような経緯から出来上った『乙女の港』には、博愛の精神が結末で描かれていたが、その他にも、川端が意図したテーマと関わる箇所があると考えられる。

「三　開かぬ門」で、校門の坂下の空家になっている赤屋敷の庭で、洋子を三千子が待つ場面がある。先に来た三千子は、物置の蔭に隠れていて、中の兄が作文を褒めて買ってくれた本の言葉を言い、洋子に甘えようと考える。ところが、後から来た洋子があまりにも真剣に三千子を探すためにそこから出て謝り、洋子の家で「薔薇は生きてゐる」について話す箇所がある。「三　開かぬ門」の四分の一が「薔薇は生きてゐる」に触れており、この遺稿集を高く評価していた川端の意向による引用がなされた回であったと考えられる。

ここでの「薔薇は生きてゐる」は、「山川弥千枝遺稿集」（昭和8・6「火の鳥」）として世に出、その後、刊行された『薔薇は生きてる』（昭和10・9　沙羅書店）である。病いに倒れた弥千枝は、それに負けず闘病生活を送っていたが死の近づいてきた頃、母に甘える言葉を小品に記している。この小品と、『薔薇は生きてる』の題名としてとられた弥千枝の歌を『乙女の港』に用いているのである。

また、「四　銀色の校門」でも、洋子が自分を奮い立たせるために「おこしてよ。おこしてよ」という弥千枝の小品での言葉を思い出し、

さうよ。病気から起き上るばかりぢやない。
家の不幸からも、仲間達の意地悪からも、しやんと起き上らねばならない。
さう思ふと、どんな不仕合せが来ても堪へられさうで、心が熱くなつて、

と考えている。ここで洋子が憶えていた弥千枝の小品での言葉は、「三　開かぬ門」で次のように続けられている。

ああ、こんなに甘つたれて抱いてほしい。母様のやはらかい絹の着物を見ると、母様のやはらかさうなひざを見ると、私はだきつきたい気持がする。そして私は只、母様のひざに触る。又は袂にさはつて見る。「ああ。」と大きな声を出す。抱きしめてほしい。

という、死を前にして母に甘え支えて貰おうとするかのような言葉が書かれている。

洋子は、家のことで進路に迷う気持ちや、三千子との友情を妬む克子のいやがらせから立ち上がろうとして、母に助けを求める弥千枝の言葉を思い出したのであろう。洋子は、弥千枝の小品に描かれた母の大きな愛に救いを求めていると考えられる。なお「三」、「四」での弥千枝の小品に見出される母の愛は、後に洋子が導かれたマダムの大きな愛と同質のものと考えられるのではないか。

『薔薇は生きてる』の引用箇所から「三」、「四」の時点ですでに母の大きな愛を作品に滲ませていたと思われ、『乙女の港』の結末で洋子を博愛の精神へと導いたマダムの「愛」を、川端が早い段階から心に描いていたと想像されるのである。

また、それ以前の川端作品での「水仙」（昭和6・10「新潮」）には、主人公の早枝が女学生同士の愛について、「女が女を愛するってことは、つきつめてゆくと、彼女が彼女自身を愛するってことになるのよ」と言う場面がある。ここでは、『乙女の港』に書かれた博愛の精神とは異なる個人的な愛が語られている。そこから「禽獣」（昭和8・7「改造」）での千花子の「虚無のありがたさ」を持つ「合掌の顔」を描いたことが一つの突破口となり、川端作品での愛も幅を持って表現されるようになったと思われるのである。

自己愛から虚無的な有難さと表現されるところまでの広がりをもった川端作品の愛（注④）が、『乙女の港』では二人の少女を通して博愛を描いたものになっていったのであろう。『乙女の港』が書かれた時には、昭和十年一月号の「夕景色の鏡」（「文芸春秋」）、「白い朝の鏡」（「改造」）によって『雪国』の執筆も始まっており、川端文学が一つの成果を結ぶ時が訪れていた。そこに『乙女の港』での豊かな「愛」が描かれた理由を、読み取ることができるのではないかと考えられる。

注

① 「11」が確認できないため原稿は、十九枚になる。なお、「2」「3」は原稿の破損で番号が失われている。

② 「28」が確認できないため原稿は、六枚になる。

③ 川端ならびに中里恒子の書簡は全て、『川端康成全集』補巻二（昭和59・5　新潮社）から引用した。

④ 後に続く「美しい旅」（昭和14・7～昭和16・4「少女の友」）、「続美しい旅」（昭和16・9～昭和17・10「少女の友」）で、博愛の精神は三重苦を抱えた花子と女教師、月岡先生の物語として生かされることになると思われる。

付記

神奈川近代文学館で、中里恒子「乙女の港」草稿を閲覧する機会を与えてくださったことに、末筆ながら記して感謝いたします。